

科学よもやま話

第1回

世界物理年によせて



佐藤 勝昭

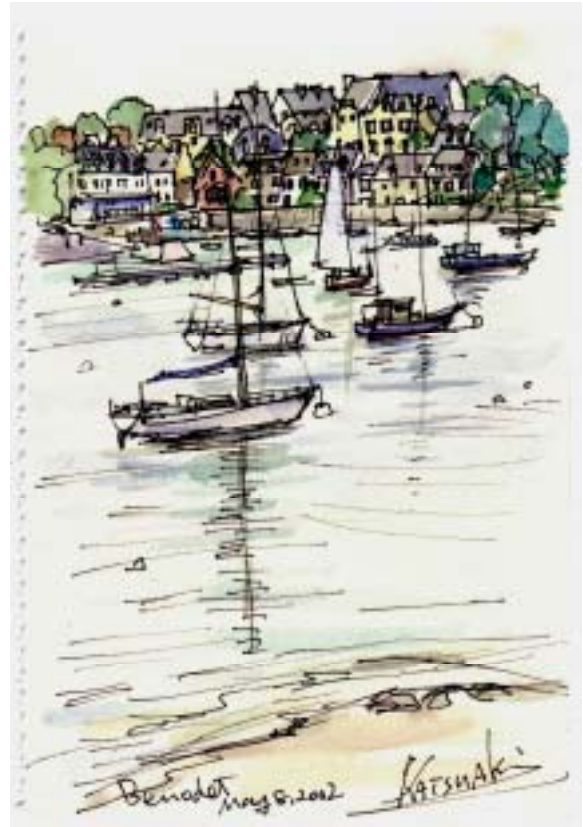
はじめまして、今号からこのコラムをお引き受けすることになった佐藤です。大学では、物理システム工学科で電磁気学や物性工学の講義を担当するほか、21世紀COEプログラム「ナノ未来材料」のメンバーとしてナノ電子材料の基礎研究をしています。

このコラムでは、国際会議のために訪れた世界各地の風景を私の水彩スケッチでご紹介するとともに、科学する心をもつ若い方々を元気づけるような小文をお届けしたいと思っています。

第1回目にお届けするスケッチは、フランス西海岸ブルターニュ地方の風光明媚なマリナーリゾート、ベノデの風景です。この町はオデ河の河口にあり、国際的なヨットレースが開かれることで知られています。2002年に日本応用磁気学会主催の光磁気国際会議(MORIS2002)が開かれました。

さて、2005年はアインシュタインが相対論など重要な3つの理論を発表してから100年目にあたり国連は「世界物理年」に決めました。

この100年間の物理学の成果が、今日のIT技術やハイテクの発展を支えてきたといっても過言ではありません。日本は科学技術立国を標榜し、機械、電子、化学などの産業を興して近代的な産業社会を実現しました。しかし、こんなにも物理をはじめとする科学技術の恩恵にあずかっているにもかかわらず、日本の多くの人々の科学離れが進んでいるのは残念なことです。2001年、日本人の科学リテラシーは先進国では最低のレベルにあるというOECDのレポートが出され、多くの人々にショックを与えました。さらに、2004年のOECD調査では、日本の15歳の数学的活用力は2000



ヨットのある風景(フランス、ベノデ) 佐藤画

年度の1位から6位へ低下したことが指摘されました。若い人の理科離れ、特に、物理離れが進んでいます。

本誌の読者には考えられないことでしょうが、物理を選択する高校生が1学年300人中16名なんていう私立進学高もあるようです。これでは科学技術立国が看板倒れになります。「世界物理年」の今年こそ、理科教育をもっと魅力的にして、このような傾向に歯止めをかける年にしたいものです。果てしない宇宙への夢、人に優しい科学技術、今後とも物理はその指導原理を与え続けるはずだからです。